

高句麗瓦編年に関する 二、三の問題

はじめに 高句麗遺跡の考古学的研究の基礎として、土器編年とともに重要な位置を占めるのが瓦編年である。筆者は、かつて先学の研究に導かれて、高句麗瓦編年の概要を提示したことがある¹⁾。

近年、高句麗の故地吉林省集安では世界遺産登録関連で大規模な発掘調査が実施され、多くの注目すべき成果が得られた²⁾。また京畿道北部地域でも従来、ほとんど知られていなかった高句麗要塞遺跡が体系的に調査され、多くの知見をもたらしている³⁾。

これらの調査成果は高句麗瓦の編年研究にとっても見逃せない内容を有しており、資料紹介を兼ねて若干の私見を述べることにしたい。

集安における近年の発掘成果と瓦編年 集安は、高句麗中期（3世紀初～427年）の首都の所在地。高句麗前期（前1世紀初～3世紀初、王都は遼寧省桓仁）に瓦は未確認で、瓦の確実な存在は中期からである。

集安では、まず4世紀前半に卷雲文瓦当が現われる⁴⁾。卷雲文瓦当には、「太寧四年」（325年、326の両説がある）の年号や、「己丑」（329年）、「戊戌」（338年）、「丁巳」（357年）といった干支をもつものが含まれており、4世紀前半から後半にかけての変遷をたどることができる。いっぽう、蓮蕾文瓦当は、4世紀後半に出現し7世紀後半の高句麗末期まで変遷をとげながら高句麗瓦の中心的位置を占める⁵⁾。

近年の調査で最も注目されるのは千秋塚から蓮蕾文瓦とともに最終末期に位置づけられる卷雲文瓦当が出土したことである⁶⁾。これまで蓮蕾文瓦当の変遷に関しては「太王陵型」→「千秋塚型」→「將軍塚型」という変遷観⁷⁾が示されており、筆者も同様に理解していた。今回の千秋塚における出土状況からは、「千秋塚型」が「太王陵型」に先行する可能性⁸⁾もでてきたといえよう。

蓮蕾文瓦当変遷をどう理解するかは高句麗王陵の比定にも密接に関連する⁷⁾。なお、国内城からは、遺構との関連で卷雲文瓦当が出土し、宮殿あるいは官衙などの瓦としても注目される。丸都山城からは、今回の調査でも卷雲文瓦当は出土していない。丸都山城の瓦については中期にさかのぼるものではなく、後期平壤城期（586～668

年）に属するものと考える⁸⁾。

京畿道北部の高句麗要塞遺跡と瓦編年 近年、漢江流域から臨津江流域にかけての京畿道北部地域で高句麗の要塞遺跡が多数知られてきており、高句麗の土器とともに瓦も出土している。そのうち、2遺跡からは瓦当も出土した⁹⁾。高句麗瓦編年にとっても重要資料となるので紹介する。

①紅蓮峰1堡壘出土の瓦当（図22） 遺跡はソウル特別市広津区、漢江の北岸の丘陵に位置する。瓦当が4点出土しており、いずれも同一型式。立体的な蓮蕾文と平板な表現の蓮花文各4単位を交互に配する文様構成は大城山城（平壤特別市大城区域）出土瓦¹⁰⁾のほか、平壤土城里などの採集品¹¹⁾などにも類例がある。

②瓠蘆古壘出土の瓦当（図23） 遺跡はソウル北方約25kmの京畿道漣川郡、臨津江の屈曲部北岸に立地する。瓦当1点が出土している。蓮蕾文6単位を配し、間を楔形の装飾で埋めるシンプルな文様構成である。本例も紅蓮峰1堡壘遺跡例と同様、色調は、赤褐色を帯びており、通例の高句麗瓦と変わらない。蓮蕾は細身で、このような大きく長い楔形の装飾は、これまでの高句麗瓦にはあまり例をみず、強い地方色のあらわれであろう。

これらの要塞遺跡は、高句麗長寿王代、475年の百済王都漢城にたいする攻撃と領有に関わって設けられた一連の遺跡とみられ、年代的な下限は、ソウル地域が新羅の領有に帰した553年におくことができる¹²⁾。これまで知らなかった地域の資料であるだけでなく、年代が前期平壤城期（427～586）に該当する点は、編年研究上、大きな意義をもつ。すなわち、この2種の瓦当に共通する最大の特徴は、瓦当面を放射状に区画する幅線が消失していることである。また、瓠蘆古壘例（図23）は、外圈線、内圈線ともにみられず、紅蓮峰堡壘例（図22）との年代差の反映である可能性があるだろう。こうした特徴は、平壤遷都（427年）から一定の時間が経過した5世紀後半から6世紀前半の時間幅の中での現象であることがわかる。また、これらの資料は後期の王都をまもる大城山城¹³⁾や前期平壤城の王宮と推定される清岩里土城（平壤特別市大城区域¹⁴⁾）から出土した瓦のうち、平壤遷都に近い時期の瓦を特定する資料ともなると考える。ただし、いまのところ前期平壤城の王宮の遺構そのものは不明で、当然ながら王宮の所用瓦も不明である¹⁵⁾。

安鶴宮遺跡の年代と高句麗末期の瓦 安鶴宮遺跡（平壤特別市大城区域）は、かねてより多量の瓦が出土しており、高句麗末期の離宮遺跡ともみられていた¹⁶⁾。この遺跡に対しては解放後に大規模な発掘調査がおこなわれ、発掘報告書では、前期平壤城の王宮遺跡と述べる¹⁷⁾。しかし、出土瓦は高麗時代に下がるものであることは再三述べてきたところである¹⁸⁾。瓦が高麗時代である以上、そのような瓦をともなって検出された建築遺構の年代もまた高麗時代とみなされることは言うまでもない。

では、高句麗末期の瓦としては、どのようなものが考えられるであろうか。定陵寺（平壤特別市力浦区域）出土瓦でみると輻線をもたず、珠文を欠く型式¹⁹⁾などは、文様変遷の方向などの点から高句麗瓦でも最も遅れる時期の瓦の有力候補になろう。

おわりに 以上、近年の注目される調査成果をとりあげ、高句麗瓦編年に関わるいくつかの問題に言及した。集安や、平壤地域に加えて京畿道のような地域で新たに高句麗瓦の存在が明確になり、また高句麗蓮蕾文瓦当に関して三燕の瓦との関係が注目され始めている²⁰⁾ことも新たな潮流である。今後より広範囲での検討をすすめ、より精密な編年にむすびつきたい。

図22・23の掲載にあたり、韓国国立文化財研究所、高麗大学校考古環境研究所、土地博物館の御高配を頂いた。記して感謝する。 （千田剛道）

注

- 1) 千田剛道「瓦からみた高句麗古都集安」（服部敬史・千田剛道・寺内威太郎・林直樹「高句麗都城と山城—中国東北地方における都城と山城の基礎的研究—」『青丘學術論集』5、韓国文化研究振興財団、1994）。
- 2) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『国内城—2000～2003年集安丸国内與民主遺址試掘報告—』、同『丸都山城—2001～2003年集安丸都山城調査試掘報告—』、同『集安高句麗王陵—1990～2003年集安高句麗王陵調査報告—』。いずれも文物出版社、2004。国内城、丸都山城、集安高句麗王陵の発掘成果については、上記報告書による。
- 3)、9) 韓国国立文化財研究所『南韓の高句麗遺跡』2006
- 4) 李殿福「集安卷雲紋銘文瓦当考弁」『社会科学戦線』1984-4、林至徳・耿鉄華「集安出土の高句麗瓦当及其年代」『考古』214、1985。
- 5) 田村晃一「高句麗積石塚の年代と被葬者をめぐる問題について」『青山史学』8、1984、谷豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」『東洋文化研究所紀要』112、1990ほか。



図22 紅蓮峰1堡壘出土瓦



図23 靺鞨古壘出土瓦

- 6) 桃崎祐輔「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海と考古学』六一書房、2005
- 7) 最近の研究として東潮「高句麗王陵と巨大積石塚—国内城時代の陵園制—」『朝鮮学報』199・200合併号、2006がある。
- 8) 註1前掲論文 高句麗後期の都城は平壤におかれた。都城の名称としては「平壤城」が使用されたが、586年の遷都を境にして「長安城」の名も使用されているので、混乱をさけるため、「前期平壤城」（427～586）、「後期平壤城」（586～668）と呼び分けている。田中俊明「高句麗長安城の位置と遷都の有無」『史林』67-4、1984参照。
- 10)、13)、17) 金日成総合大学考古学・民俗学講座『大城山の高句麗遺跡』金日成総合大学出版社、1973。
- 11) 朝鮮総督府『高句麗時代の遺跡 図版上冊』1929。
- 12) 崔鍾澤「京畿北部地域の高句麗関防体系」『高句麗研究』8、1999。
- 14) 小泉顕夫「平壤清岩里廢寺址の調査（概報）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、1940。
- 15) 前期平壤城の王宮が清岩里土城であるとしたばあい、王宮建築は瓦葺きでない可能性もあることは、千田剛道「高句麗・百濟都城における瓦の使用」『文化財論叢Ⅲ』奈文研創立50周年記念論文集、2002で指摘した。
- 16) 関野貞「高句麗の平壤城及び長安城に就いて」『朝鮮の建築と芸術』岩波書店、1941。
- 18) 千田剛道「高句麗・高麗の瓦—平壤地域を中心として」『朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所、1996および「高麗の瓦—平壤と開城の比較を中心に—」『高麗開城の文化遺産的価値と保存』イコモス韓国委員会、2005。
- 19) 金日成総合大学考古学・民俗学講座『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』金日成総合大学出版社、1976、164頁、207図の5など。
- 20) 万雄飛・白宝玉「朝陽老城北大街出土の3～6世紀蓮花瓦当初探」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集—』奈良文化財研究所、2006および註6前掲論文参照。

図版出典

図22：『南韓の高句麗遺跡』246頁、図23：同書64頁